

徳間書店から佐藤六龍先生の新刊が出ました！

平成23年4月30日刊！

# 古代中国の大予言書

## 「推背図」開封

佐藤六龍著 一三五ページ 定価一、六八〇円（税込）  
前払送料六〇〇円・代引送料七五〇円

歴史支配者が密かに読んだ予言書は、  
あまりに適中する予測ゆえ、  
発禁処分に。  
宇宙創生から近未来まで詳細に  
図示された謎を大公開！



世の中はすべて循環するからこそ、未来予測は可能！  
七世紀の予言書が、二〇世紀の戦争までの描写！  
人類の歴史は「推背図」通りに、動いてきた！！

ノストラダムスを  
凌駕する予言書が伝える  
驚愕の未来像とは――

- ◎ 大災害で世界はいったん混乱するが、  
新文明が誕生する
- ◎ 超大国アメリカの没落が始まる
- ◎ 第三次世界大戦が始まる日
- ◎ 地球上から王室が消える！？
- ◎ 兵士のいない戦争が起きる
- ◎ 世界はやがてひとつの国家になる

# 本書の《はじめに》——歴史は奇書『推背図』の予言通りに動いてきた!》より

前略——かつて今日ほど、中国に対する世界中の関心が高まっている時期はありません。今や世界の政治も経済も軍事も中国を無視して語ることはできません。これから中国の政治はどこに向かうのか。中国の経済はどこまで伸びるのか。国際社会の熱い視線が注がれています。それらは最新テクノロジーを駆使したデータで探ろうとの動きもあります。中国には古代より人間の未来を占う「五術」という術法が確立していました。「五術」のなかには「測局」という占術の部門があり、世間の大勢や国運の盛衰、吉凶を卜する（予言する）ことを行っていました。この「測局」の予言書は数多く残っていますが、そのなかで最も信頼できる代表的なものが、この『推背図』なのです。

『推背図』は、今から一三〇〇年以上の昔、唐の太宗・李世民の命によって唐朝の天文術師・李淳風と袁天罡（天綱）の二人が作ったと伝えられるものです。この予言書は、二人が生きた時代から現代よりまだ先の遠い未来まで予言しているものです。

ヨーロッパでは、ノストラダムスの予言がよく知られており、日本でも二十世紀末の一九九九年にやってくる騒がれ終末論が一大ブームとなりました。結果は何も起こらず世界は無事に二十一世紀を迎えることができ、ノストラダムスの名前も人々から忘れ去られました。

しかし、この『推背図』は、ノストラダムスの予言と比較すると、漢詩を用いた表現が知的文学的で、予言内容も実に具体的です。その記述事項はその後の歴史展開をピタリと言い当てており、まさに中国・アジアの歴史は『推背図』の通りに動いていったと明言してもおかしくはありません。

有名な箇所を紹介しますと、第五象（101ページ参照）にあの楊貴妃の登場を予言し、時の皇帝・玄宗の「木易逢ふ」という表現、すなわち、「木」という字と「易」という字を合わせて「楊」という字を導き出しています。——後略

## 本書の内容見本（実際は、図と文章の部分は別の頁になっています。図は一頁に掲載されています）

「鳥に足なく」ということは、「鳥」という字の足の部分「灬」を取り、「山に月あり」から「山」を加えると、「鳥」という字になる。

「旭初め升る」という表現は、「日の丸」を国旗にする日本を連想させる。鳥という文字からも日本と解釈される。

その日本が中国に侵略を始めたのが、「旭初め升る」で、「人みな哭く」という言葉になっている。

一九三七年の盧溝橋事件を指していると中国では考えられている。その後、両国はドロ沼化した日中戦争に突入していくが、一方、太平洋地域では対日経済封鎖が形成されていった。

日本は一九四一年十二月八日、ハワイ島真珠湾を奇襲、アメリカとの太平洋戦争に突入する。頌の一句「十二月中の気は和かならず」は、開戦を暗示する二国間の関係を想像させる、二句の「南山に雀あり」と「北山の羅」という言葉から日本とアメリカがあぶり出される

### 第三十九象 壬寅 三三 頤

識曰

鳥無足 山有月

旭初升 人都哭

頌曰

十二月中氣不和 南山有雀北山羅

一朝聽得金雞叫 大海沈沈日已過



聖歎曰此象疑外夷爭門擾亂中原必至酉年始得平定也  
宵琴曰此象主中日戰事鳥無足而立于山上乃鳥字也山有月乃崩字也旭日初升乃明指日本  
舉兵侵華初則其勢甚銳迨至十二月八日太平洋戰事發生始如雀入羅網羅乃羅斯幅也更  
至乙酉年甲申月正癸年金月之時日皇竟下詔降此象事跡乃在民二十至三十四年間與金  
陵塔劉碑識文相合奇哉